View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Bukkyo Universty Academic Knowledge & E-resources Repository: BAKER

佛教大学保健医療技術学部論集　第 10 号（2016 年 3 月）

研究報告

農村集落住民の支援ニーズの検討
―生活継続へ向けた互助型ボランティア介入へ向けて―
Fundamental Investigation on the support and needs of farm village inhabitants
― For mutual-help volunteer intervention for life continuation―

芝山　江美子　Emiko SHIBAYAMA
田野中　恭子　Kyoko TANONAKA
永井　香織　Kaori NAGAI
新田　紀枝　Norie NITTA
太田　暁子　Kyoko OTA
廣井　寿美　Toshimi HIROI
町田　理恵　Rie MACHIDA
井本　寿子　Toshiko IMOTO
山上　徹也　Tetuya YAMAGAMI

抄　録

目的：本研究では C 地区の高齢者の介護に対する思い，生活意識や文化的背景，価値観を知り，農村集落に生活し続ける思いについて明らかにすることを目的としている．

互助型ボランティアを導入するには，農村集落に住み続けたい住民のニーズを把握することが重要である．本研究で明らかにする住民のニーズをもとに，「自発的意思に基づく農村集落における互助型ボランティア」の開発につなげる．ここで言う互助型ボランティアとは，住民組織のうち地域や互助活動を担っている町内会及び自治会などの地縁団体を指す．

方法：事例研究として，定性的アプローチを用いて，データの収集およびそこから得られた内容を分析する．

結果：住民が農村集落に生活し続ける思いを語った内容は「**居住地に対する愛着と住み続けている当たり前の心地よい印象**」「**住民の横の繋がりと結いという結びつき**」「**高齢化に伴う健康障害への覚悟**」「**地域の発展への願いと今後の生き方**」という大きな 4 つの視点に分類ができた．住民は地域に住むことに意義を見出し，また生活を継続したいと願っていることも分かった．

考察：今後，高齢化の進む地域を運営するためには，互助型ボランティアの導入が有効であり，家族における介護を支える体制としても有効かつ必要であると考

えられる．共助を取り入れることにより，地域住民の共に助け合い，生活する力という貴重な資源が有効活用されるのである．高齢者のニーズは，若年層のボランティア意識とすりあわせることで，新たな互助型ボランティアの構築へと展開するものと思われる．今後の課題として，これらの聞き取り調査を通して，互助型ボランティア構築への政策提言も併せて実施していきたいと考える．

キーワード■農村集落，高齢者，介護，互助型ボランティア

はじめに

現在日本国内では，人口減少や高齢化に悩む山間地域，農村集落が多く存在する．そのような地域を創生するために必要なことはなんだろうか．本間ら[1]は，公共福祉サービスの充実に加えて「共助」の必要性を指摘している．本研究の「互助型ボランティア」とは，住民組織のうち地域や互助活動を担っている町内会及び自治会などの地縁団体を指す，互助型ボランティアによる「共助」を充実させることを目指し，どのような互助型ボランティアが農村集落では必要とされているのかを住民の意識調査により明らかにしたい．筆者は，平成26年度，B町，町民福祉課，子育て健康課，地域包括支援センター職員に対し，C地区について聞き取りを行い，地域住民の長年のつながり，コミュニティがしっかりしている地域であることをまず知ることが出来た．隣近所，同級生，同郷（隣県から嫁ぐ人が多い）等，種々のコミュニティがあり，住民はそれぞれ複数のコミュニティに属していること，運動会は，小学生・中学生・老人会等合同で開催しており，世代をこえた繋がりもあるということも分かった．この聞き取りを基に，調査対象地区としてC地区を選定した．互助型ボランティア導入には，その基盤として地域内に住民同士のつながりがあることが重要だと考えられるからである．

目　的

今回の聞き取り調査では，農村集落における互助型ボランティアを開発するためには，C地区の住民の高齢者の介護に対する思い，生活意識や文化的背景，価値観を知り，農村集落に生活し続ける思いについて明らかにすることを目的としている．

方　法

1. 調査対象地域の特徴

A県のB町C地区を調査対象地区とする．C地区は，A県の最北部に位置し，北はD県の県境に接する．標高700mを超える山間部であり，E川源流部に位置し，標高1500～2000mの高山に囲まれている．B町は，国道や高速自動車道，JR線などが縦断し，山間部とはいえ比較的交通網が整備されている．しかし，B町の中でも，C地区は，市街地から遠く離れ，町の中心地から車で約45分～60分を要する．また，関東では唯一日本海側気候であり，冬季は200cm近い積雪となり，11月末には交通が閉ざされる．医療機関は少なく，準無医地区に指定されている．一番近い医療機関にかかるためにも，バスで30分を要す[2)]．歴史的にみると，昭和30年ダムが建設され，1,742名の町外への転出があった．この年，C部落が水没し，先祖伝来の田畑，家屋敷を離れる人が多かったと推測される[3)]．

C地区は，面積90㎢，人口442人，高齢化率44.57％である．筆者らが役場からの聞き取りを行った際，役場から示された世代別人口は，1歳～14歳，24人（5.88%），15歳～64歳219人（49.54%），65歳以上197人（44.57%）であった．（2015年度）

C地区では，夏季は在宅療養が可能であっても冬季は困難となる．高齢者同士の電話での連絡網があり，誰が，いつ，越冬のため老人ホームに入所したかと言うことを把握している．「老人ホームに入所する」と言うことは，よく耳にする話題であり，住民にとって施設入所への抵抗感は少ない．高齢者のいる世帯の構成割合を表1に，要介護者，要支援者の割合を表2に示す．

＜表1　高齢者（65歳以上）のいる世帯の構成割合＞

単位：件，％

	件	世帯比
総世帯数	186	―
内，高齢者一人世帯	31	16.67
内，高齢者夫婦世帯	35	18.82

出典：第61回群馬県統計年鑑（平成27年刊行）

＜表2　要介護者，要支援者の割合＞

単位：人，％

	人数	65歳以上比
要介護・要支援認定者	50	25.77

出典：第61回群馬県統計年鑑（平成27年刊行）

2. 協力者

協力者は①65歳以上，②C地区に20年以上住み続けている，③十分に会話が可能である，以上を条件に，これに該当する住民を，男女や独居などの条件が偏らないように依頼しC地

区役場にて選出をしてもらった．あらかじめ，役場から口頭で承認を得られた住民について訪問し，あらためて同意を得たうえでインタビューを行った．

今後はさらに実態を把握するためにも継続的にかかわる予定である．データ収集期間は，平成27年8月から平成27年9月までとした．インタビュー対象者は，男性5名，女性5名の計10名である．年齢は，男性90歳代1名，男性80歳代2名，男性70歳代2名，女性80歳代3名，女性70歳代1名，女性60歳代1名である．居住年数について，男性は約90年が1名，約80年1名，約70年3名である．女性は，居住約60年1名，40年以上1名，約40年1名である．家族構成については，本人と妻である対象者が4名，本人と夫である対象者が1名，子世代と同居している対象者が2名，夫・子世代・孫世代と同居している対象者が1名，独居が2名である．運転免許を所有している対象者は，男性5名，女性2名（内1名はバイク）である．職業は，無職3名（内2名は元民宿経営），農業1名，兼業農家5名（民宿経営2名，民宿手伝い1名，民芸品作成販売1名，元郵便局員1名），組合水道管理勤務1名となっている．詳細は表3に示す．

表3　インタビュー対象者の特性

	年齢歳代	性別	家族構成	居住年（約）	健康状態の自覚	運転免許	仕事	所属組織
A	90	男	本人・妻	90	健康	有	元民宿経営・無職	
B	80	女	本人・夫	60	健康	無	元民宿経営・無職	
C	80	女	次男家族と同居	60	あまり健康でない	無	無職	
D	70	男	本人・妻	70	健康 高血圧（内服）	有	元郵便局員 農業	前区長
E	80	男	本人・妻	75 5～6年地区外に出た期間あり	健康 心音異常 手のしびれ（内服）	有	組合水道管理 家庭菜園あり 元バス運転手	
F	80	男	本人・妻	80	あまり健康でない 糖尿病・不整脈（内服） 膝関節痛	有	補助的農作業 村の人足	俳句会 老人会
G	80	女	独居	40以上	健康 高血圧（内服）	無	民宿経営 農業	カラオケ 俳句
H	70	女	本人 娘夫婦	60	高血圧（内服）	バイク	民宿（娘夫婦と運営，平日は一人で運営） 農業	老人会
I	60	女	本人夫婦 息子夫婦 孫3人	40	健康	有	家業（民宿） 手伝い 農業	婦人会 食生活改善推進委員
J	70	男	独居	70	健康 糖尿病・狭心症・不整脈（内服）	有	農業 民芸品（布草履）作成販売	ゲートボール 民芸品作成講師

3. データ収集方法

半構成的面接法を用いた．面接内容はICレコーダーにて録音を行い，録音データより逐語録を作成した．そこから得られた内容について分析を行った．

質問事項は次のとおりである．

① どのくらいこの地区で生活しつづけていますか

② ここでは，いままでどんなお仕事をされてきましたか

③ 今はどのように過ごしていますか

④ ここで生活することで，困っていることがありますか

⑤ その困っていることに対して，どのように対処していますか

⑥ 健康を保つためにはどのような工夫をしていますか（個人で，地域で）

⑦ この地区で生活し続けるのはなぜですか

⑧ 地域の人々とどのように連携できていますか

4. データ分析方法

協力者10名の基礎情報はインタビュー内容の参考とする．録音した内容から逐語録作成後，文脈のまとまりごとにコードを作成し，意味内容の類似性や関連性を考慮した上で，内容分析を行った．研究の信頼性・信憑性を確保するため，別の研究者がすべて確認を行い，語られた内容に基づいた解釈となるようにした．詳細は表4に示す．

表4　農村集落に生活し続ける思い

カテゴリー	サブカテゴリー
居住地に対する愛着と住み続けている当たり前の心地よい印象	車がある利便性の実感
	インターネットや宅配の活用
	自給自足の生活
	豊かな自然環境の魅力
	自然と共存する知恵
	夏季は住みよい場所
	住めば都という思い
	この生活が当たり前
	豪雪とともに生きる覚悟
	豪雪とともに生活する知恵
	昔の過酷さに比べれば住みやすくなったという印象
	長年生活してきた土地への愛着
	家を守るという責任感
	ここが終の棲家という覚悟
	この場所しかないというあきらめの感情
	他の地域に出ることへの不安
	地域外に住む知人・家族の気遣い
	市町村からのサポートの存在

住民の横の繋がりと結いという結びつき	他者に喜んでもらえる仕事が生きがい
	日々を楽しく過ごす趣味の共有
	大切な仲間の存在
	自ら地域の発展に携わってきた誇り
	コミュニケーションの場としての寄合の存在
	村の生活を維持していくための役割の遂行
	地域の発展に努力した先人への敬意
	えいっこという助け合いの絆
	地域を存続させてきたのは古くからのしきたり
	困難な環境だからこそ共同作業が必要
	皆のおかげで或る今の自分
高齢化に伴う健康障害への覚悟	送迎や出張を行う医療施設の存在
	介護施設の選択的な利用
	お互いの安否を気遣う互助的関係
	健康はここで生活を続けるために必要な要件
地域の発展への願いと今後の生き方	今後の生活を保障する老人合宿所の提案
	今後の外部からのサポートに対する提案
	今後の地域の発展を願う熱い思い
	地域総出で行う楽しい行事の継承
	この地域を守っていきたい思い
	皆をサポートする役割の自覚
	自力で対処しなければならない環境
	地域の人々の役に立ちたい思い
	若い世代への理解と歩み寄り
	若者に住み続けてもらいたい思い
	地域を離れる子どもの意思を汲む思い
	高齢でも役割をもって生活できるという思い

5. 倫理的配慮

B 町と調査対象となる C 地区住民に対し，研究の目的・方法を文書と口頭にて十分に説明し，自由意思で諾否が決められるよう配慮した．十分に理解が得られ，参加の意思を確認できた場合，承諾書に署名をもらった．説明事項は，次のとおりである．①研究目的及び内容②研究期間及び研究対象③研究方法と手順④研究に参加した場合の利益と不利益⑤自由意志による参加⑥危険性について⑦同意撤回の自由⑧プライバシーの保護と成果の公表について⑨解析終了後のデータの取り扱い⑩研究者⑪問い合わせ先の 10 の項目について説明を行った．また，情報は，すべて個人が特定できないように記号化し，第三者にはわからないよう配慮した．研究期間中のデータは，すべて C 地区研究責任者が鍵のかかる保管庫で管理し，個人の情報がもれないようした．データは，研究以外に使用せず，研究終了後に音声データは完全に消去し，その他のデータはシュレッダーにかけ処分した．

結　果

インタビュー内容を分析し4つのカテゴリーを見いだした．それぞれ「居住地に対する愛着と住み続けている当たり前の心地よい印象」,「住民の横の繋がりと結いという結びつき」,「高齢化に伴う健康障害への覚悟」,「地域の発展への願いと今後の生き方」と命名した．

1．居住地に対する愛着と住み続けている当たり前の心地よい印象

住み心地の印象は，生まれ育った者と，嫁に来た者との間に違いが見られた．また，車の運転免許の所持が，住み心地の印象に影響を与える要因になる可能性も一方伺えた．

まず，この地域に生まれ育った者は，この地域を住みにくい場所とは思っていない．例えば「**ここは限界農村集落で，豪雪地で，他所の人は恐ろしい所だと思っているだろうけど，住めば都で住んでいるものは全然**」,「**子どもの時からここにずっといた．何の抵抗もなくここに住んでいる**」,「**今までずっと住んでいるから，当たり前だと思っているから**」と，交通の便の悪さや積雪の多さなどの厳しい環境も“こういうもの”として受け止めている．

他の地域と比べて住みづらいと思うことは,「**雪の量が半端じゃないから，除雪作業の手間や対策にお金がかかる**」という点をあげている．各家庭に1台はあるという除雪機は，購入に数百万円かかるだけでなくメンテナンスにも費用がかかる.「**俺はブルドーザーがあるけど，年間の維持費が3～4万かかかるよ**」という意見もあった．自家用車も四輪駆動にし，雪用タイヤの装備も必要となる．しかし,「**昔のことを言うと大変だったけれども，この辺はね，除雪はやや完璧さね．苦労は付きもんだけれども，それほどね.**」「**ここにいるんだからね．ここに住んでいる以上は逃げられない．だから雪とね，いわゆる，喧嘩しながらやらなくちゃ.**」と語っているように，積雪の厳しさは実感しつつ，生涯付き合っていくものだと認識している．

他所から嫁に来た者からは，否定的な発言も聞かれる.「**子どもがいるからしょうがねえ，姑もいたししょうがねえ我慢した**」「**いやになりましたよね．こんな山ん中ねえ**」「**いいところはないね．（この土地を出たいと思ったことは）年中だよ．冬は嫌だなあなんて思っているね**」と，交通の便や雪の多さに苦痛を感じている発言がきかれている．他の地域から来た者にとっては，以前の暮らしと比較し，この地域の環境の過酷さが身にしみて感じられる．しかし，その中でも,「**22でお嫁に来たから．何も考えないで来た．だからこうやっていられる．あまり不便さを感じなかったですね．ただ，車がないとどうしようもないからすぐに免許を取りました**」と語っている者もいた．自身で車の免許を所持しているかどうかによって，生活の質が変わってくることがうかがえる．

車の所持が生活の鍵となっていることは，以下の発言にも表れている．90歳代の住民は,「**割合交通の便がいいんだけどね．こんな山の中なんだけど．割とね．それでね，車に乗るん**

さね.」と，現役で運転するため，生活に不自由はないと発言している．免許を持たない住民は「**ほとんどあるんじゃないかね．一軒に一台．男衆がいなけりゃね．出づらくてね．村に店屋がないからね．ほんとに困るんだよ.**」と述べている．また，バイクを運転できる住民は「**運転はバイクだけ．今考えれば，免許取っとけば良かったと思うよ**」と述べている．その他「**女の人は運転ができない．思ったものが買えない.**」の言葉のように，運転できる男性が，この地域の生活を支えていることがうかがえる．また，「**機械はあっても親父さんがいないと使えない**」という言葉が示すように，除雪機の運転を任されているのも男性である．この地域では，男性には車の運転ができることが求められており，女性は男性に運転を依頼する構図があることがうかがえる．

多くの者に共通する表現は，“昔の大変さに比べたら，今は便利で生活も楽になった”ということだ．「**ダムができる前はバスも通らなかった．冬はずっと閉鎖されている状態だった．生活も変わった．そういう意味ではいい時代になったから**」，「**峠を越えて学校に通ったけど，トンネルができて，テレビも入って，電気もつくようになったし．それを 80 年も見てきた．どんどん世の中が良くなってくる**」，「**昔は除雪機なんてなかったからカンジキ履いてやりました．食料もたくさん買い置きしていた．今はそういうことはない.**」，「**今はおかげさまでね，便利になって，昔のことを思えば，ほんと住みよくなった．生活の手段っていうかね.**」などと語っている．このような言葉から，以前の厳しい除雪作業を知る年代の人々にとっては，自然に雪が落下する屋根の構造や，大型の除雪機の導入により，現在は楽になったという認識にある．

この土地を離れようと思ったことはないかという質問に対し，この土地で生まれ育った住民は「**なんで山を出ないのって言われるけど，こんないいところはないと思っているし，何の不自由も感じない．これが好き**」と答えている．また，長男としてこの土地に生まれた住民は「**俺はカタツムリなんだよ．農家の長男だから，出してもらえず家を背負って動けないでいたんだから.**」と答えている．この土地への愛着や，家を継ぐという責任感が，地域を守りながら生活を続ける原動力となっている．

2. 住民の横の繋がりと結いという結びつき

この地域では，対象者のようにインタビューに答えられる住民は，頼りにするよりも頼りにされる側の立場である．「**若い者はほとんどいない．65 や 70 は若い方．80 がやっと年寄りだ**」，「**若い者は勤めに出ている．そのために若い者が使えない．退職したような 60 ～ 70 代の人が頑張らないとやっていけない**」，「**こういうところ住んでいると，若い者がいないから雑用頼まれる.**」という語りに裏付けられる．

特に男性は，除雪作業や移動手段となる車の運転など，生活に必要な労働力として，村の中で活躍し続けてきた．夫に先立たれた住民は「**困っていることは男手がないことかな．いない**

人は皆近所の人がやってくれている.」と，答えている．また別の住民は「**みんな主人がね，やるからね．女衆はやんなくもね．そういうの（運転）は男衆がいなけりゃね．出づらくてね.**」と語っている．この地域の男性は，高齢者といえども，現在も労働力として相談役として人々の助け合いの中心となって地域を守っている．

この背景には，山間部の生活を豊かにするために，自分たちで道を切り開き，守ってきた歴史がある．例えば，「**借金して水道タンク作ったりして，自分で管理するように**」「**地元からバスを通すよう本社まで行って交渉した．運転手がいないので自分でやった**」「**テレビも山間部で映らないから組合を作って映るようにし**た」など，自分自身が地区の組合水道を作り管理を行う，都市部からバスを通すために初代の運転手を務めるなど，積極的に行政などに働きかけ，生活の質を高めてきた．また，「**水道もみんなして掘ったんだって．昔の人はえらかったね．みんな自分たちでしたんだもんね**」「**今まで台風や地震でも水が止まる，濁るということはない．自分たちで作って，行政に認めてもらって**」「**明治5年に学校教育が取り入れられた直後，村のほとんどの人が教育しなくちゃダメだって，気持ちが一つになってお寺の小学校が始まった．原始林だったところを切りだして，村の人が手斧で削ってすごい校舎をたてた．ご先祖様がこんな努力して学校を開いてくれたことを感謝している**」などの語りがあった．地域の人々が力を合わせて交通や教育，ライフラインなどを自分たちで切り開き，生活を豊かにしていったことを誇りに思い，現在もその恩を忘れず生活している．このような歴史を背景に，“問題を解決するために自分たちで行動する”という考え方を持った積極的な住民像を見いだすことができる．

この地域の高齢者は，現役で仕事をこなし，地域のために尽力する生活を送っている者も多い．「**まだ現役で仕事しているから．できるだけここで頑張っていきたい．協力し合って，ここ（の近隣）もうちが動けなくなると大変だとおもう**」「**組合水道の管理が必要．水道局みたいなことをしている．今は後釜も見つかって研修中**」「**部落を維持していくための段取り．そういう用事がいっぱいある，この辺は**」「**百姓して，作ったものをここでお客様に出す．ものすごく忙しい．やりがいがありますね．お客さんが喜んでくれる**」と語っている．

また，趣味や地域の行事を楽しみに生活する者もいる．独居である住民は，「**私は一人でいても，やることいっぱいあるから．会話の中からもたくさん勉強できる．この地区の俳句の会も，60年も続いて県に表彰された**」と語っている．その他，「**運動会は楽しみだね．獅子舞もある．そういうのが楽しみでね**」「**運動会もみんな一緒にやって素晴らしいんです．今度獅子舞もあるけど，素晴らしいんですよ**」「**写真をね．道楽だよ.**」などの発言もあった．

このように，畑仕事，民宿の手伝いなど役割をもって仕事をしていること，趣味を楽しむことを生きがいとして生活している．

近隣住民との結びつきは強く，日常的に助け合いが行われている．「**地域のまとまりはいい．みんな人がいい．年寄りは特に助け合いが多い**」「**こういう地域だからまとまりはある．横の**

つながりがないと生きていけなかった．えいっこ，結いという」「**村中の人が何でも話せる人でしょ．友達もたくさんいるし，みんな友達みたい**」と語っている．このように，住民同士の結びつきは強いが，一部の者は以前のような結びつきが薄れていることを嘆いている．「**昔のことを言うと，人情的な，細やかな（結びつきが）良かった．助け合いながらね，おめえんとこいくから，俺んとこも来いというようなね．それが今ちょっとないんだよね．そういうことも大事だと思うんだけどね．**」と語っている．また，地区では“えいっこ”と呼ばれる助け合いの絆も強いと考えられる．昔から炭焼きや農作業，除雪作業を共同して行わなければ生きていけなかった環境から，相互扶助行為がごく当たり前の文化として継承されてきたのだろう．「山の中で生活するには，横の繋がりがなければ生きられない．隣組の外にも，屋根の葺き替え・火事が出た時の手伝い・冬期でも葬式がだせるように等，いくつもの別組織がある．暗黙の了解として，守らなければいけないこと（例：水路の清掃作業の日には必ず出る）が，先代から言い継がれている．」，「えいっこ（あいこ＝お互い様）」「結い」として，先に田植えが済めば，済んでいない家を手伝い余った苗を届ける．養蚕している時代には，餌の桑が足りない家があれば，自分の家の桑を分けるなど，お互いに助け合って暮らしている．その繋がりがあるから，お互いの様子がわかる．」といった住民の発言から，生活のあらゆる場面に相互扶助の精神が浸透し，生活を支え合ってきたことが分かる．

3．高齢化に伴う健康障害への覚悟

現在困っていることは何かを尋ねたところ，「**話し相手がいない．対話がないんだから，そういうことで困ってる**」と答える者がいた．また，別の住民は「**話ができることは年寄りは喜ぶ**」と，自分自身が近隣の高齢者の話を聞くようにしていると述べている．集会で頻回に集まることも難しくなったり，配偶者がいなくなった者の対話が減少している問題を挙げている．

通院については，「**病院は運転していく**」「**病院はみんな送迎付き．玄関まで来てくれる**」「**この辺は○○病院が何十年も来てる．△△病院も曜日決めて，公民館に来てやってくれる**」の語ってくれたように，かかりつけの病院に通う場合は，家の前まで送迎が来てくれること，巡回診療などがあることで，不自由はないという意見が多かった．

しかし，そのほかに医療面への不安を述べている者もいた．「**急に頭が痛くなったりするとやっぱり我慢しちゃう．早くいけば良くなるけど，こじらしちゃうから，なんでも**」「**他の病気になったときに，どういう病院に行ったらいいか判断がつかない．そういう時は，娘がインターネットで調べてくれる**」「**○○病院では医師がそんなにいないからアルバイトの先生がやってるんだよ．俺の先生は土曜日午前中しかいない．何かあったらどこに行けばいいんだよ．△△病院に行けっていうけど，カルテがないだろ**」と異常時の医療機関へのかかり方について不安を訴えている．

数年後の自分自身の健康状態について不安を述べるものも多かった．独居である住民は「**重**

症ならコロリと逝ければいいけど，寝たきりになるのが心配」と不安を訴えている．また，近所同士，お互いに様子を見ていることもうかがえる．「**民生委員に電気が夜つかなかったら心配してくれって言ってある**」「**足跡がないと電話してみたりして**」「**会に参加しないと，どうしたのってなるし**」など，お互いの行動がいつもと違う時には，気にかけて連絡をしあう様子が伺える．そして，留守にするときは，隣の家に伝えておくなど，正確な安否確認ができるよう連絡を取り合っている．独居の人は，万が一のために，携帯電話を近くに置いて寝る，いざというときに外から開けられる扉を伝えておくなどの工夫もしている．

介護が必要な状況になった場合について，親の介護経験のある住民は「**施設のほうが安くて楽．冬だけそこに頼むこともある**」と答えている．また，「**ここで長く住むためには，年寄りは人の世話にならなければ．手伝いをしていた人も高齢化してきた**」「**介護が必要になったらどうにもなんないんじゃないかな．心配はしてるけど．寝たきりになったらここにはいられねえ**」と，自宅で過ごすことは難しいと考えている者が多いことがうかがえる．この地域の冬の生活は厳しいため，冬だけ都市部に出る人もいる．都市部の暮らしは退屈でなじめない，行ったらだめになる，動けるうちは多少のことは助け合って，ここで生活したい，という考えを持っている人が多い．普通に暮らせるうちは，助け合いながら，できるだけここで住んでいたいが，介護が必要になったときには，施設に入ることや子どものところに移るのは仕方がないという気持ちを持っている．

子どもが少ない，若い女性が少ないなど，少子高齢化による地域の将来を案じている一方で，子どもや若者の流出は仕方がないと考えている．「**自分の子どももそうだけど，子どもが大学行きたいっていうのを駄目って言えなかった**」「**過疎地の子どもは競争心がないって言われる．そういう意見があると引き止められない**」「**子どもだってかわいそうさね．4人5人じゃあ，集団生活できねえからさ．大人になってから，やっぱり大変じゃねえかな**」と語っている．

4. 地域の発展への願いと今後の生き方

地域の今後については，自分たちの先祖を敬い，何とかこの村の歴史や行事を残していきたい気持ちを持っている．「**大事にしていかなければならない，昔からのことはなくしたくない．まだ獅子舞もある．そういうのが楽しみで**」という語りがあった．

外部からの協力としては，「**年寄りが自分の目で見て買いものができる行商，弁当などの食事の援助**」があると良いと提案している．「**年寄りばかりになったら，寄り合いみたいに冬の間は合宿所みたいなところがあればいい．廊下でつながってて，談話室があって．学校の教員宿舎とか保育所も空いてるし．老人合宿所，作ってもらいてえな**」と，この地域の中で住民がともに協力し合って生活できる場所を提案している．

また，「**まず，子供が増えないこと，仕事がないこと，なんてことはね，この辺でもやっぱり問題になる．だからなかなか大変さね**」という言葉のように，若い人が村に残れるよう，新

しい人が移り住んでくれるよう，産業があると良いと考えている．

生活面から見ると60年前のダム建設により，道路が整備されたと考えられるが，産業面から見ると，林業が衰え，スキー場を基盤とした民宿経営も一時の勢いを失った，少子高齢化も進んでいる，という危機感を抱き，80～90歳を超えても，地域に貢献し，将来に向けた対策を必死に検討している者がいた．「**一日でも長く，自分がみんなの手伝いができればと思っている．あと5年くらいかな．この地域を守っていきたい．出たくはないな．ここでできる限り人の面倒を見ていたい**」と語っている． また，ある住民は「**この土地は絶えそうで困らあ．ここからトンネルを開けてもらおうと思って，30年くらい運動している．過疎を解消するためにはトンネルを開通することしかない．私はこれが念願で，これができれば死んでもいい．それっきり考えてる．寝ても覚めても，これっきり考えてる**」と熱く語っている．

以上のように，村の存続と活性化について考え続けている郷土愛に満ちた住民の思いが語られていた．

考　察

本研究ではC地区の高齢者の介護に対する思い，生活意識や文化的背景，価値観を知り，農村集落に生活し続ける思いについて，「居住地に対する愛着と住み続けている当たり前の心地よい印象」「住民の横の繋がりと結いという結びつき」「高齢化に伴う健康障害への覚悟」「地域の発展への願いと今後の生き方」という大きな4つの視点に分類ができた．住民は地域に住むことに意義を見出し，また生活を継続したいと願っていることも今回の聞き取りで分かった．農村集落の今後について検討するためには，農村に住む住民のニーズを把握することがまず必要不可欠であり，住民のニーズをもとに，「自発的意思に基づく農村集落における互助型ボランティア」の開発にもつなげることができると考えられた．

今後，高齢化の進む地域を運営するためには，互助型ボランティアの導入が有効であり，家族における介護を支える体制としても有効かつ必要であると考えられる．共助を取り入れることにより，地域住民の共に助け合い，生活する力という貴重な資源が有効活用されるのである．高齢者のニーズは，若年層のボランティア意識ともすりあわせることで，新たなボランティアモデルの構築へと展開するものと思われる．今後の課題としては，これらの調査件数をさらに継続的に増やし互助型ボランティア構築への地域創生の政策提言にも併せて実施していきたいと考える．

C地区は豪雪地であり，冬季は除雪作業が生活の主軸となる．体力を要し，重機を動かす除雪作業は，男性の役割が重要になっている．また，町への移動手段である車の運転も，かつては男性の役割であった．そのため，男性が生活を支えているという意識が高いと考えられる．須貝ら[5]の調査によると，男性の高齢者は，一種の社会的な役割であるボランティア活動をし

ていることが，生活の満足度の高さが有意に関連していることが明らかにされている．高齢になっても男性は，若者や女性から頼りにされる存在であり，その役割意識が一層，“そこに居る”ことへの価値をもたらしていると考えられる．

C地区を自らの手で切り開き，守り続けてきた高齢者は，現在も村を維持するための労働，住民を支援するための労力は惜しまない．自分の体が動くうちは，みんなのために働きたいと願っている．住み続ける要因の１つに，地域生活を共につくりあげることに価値を見出している．

今回の結果から共助の息づく地域社会とは次のようなものであると考える．

① 要介護者自身にもできる限り自分の能力を地域に役立つことができるような機会を作り出す．

② 介護者自身には，前向きで介護を価値あるものとする介護意識を根付かせる．

③ 十分な社会的サービスを利用する．

④ 家族における介護を支える体制づくりの働きかけを行う．

本研究では，④家族における介護を支える体制として，互助型ボランティアの有効性も視野に入れ，共助を取り入れることにより，地域住民の共に助け合い生活する力という貴重な資源がさらに有効活用されると考える．

おわりに

今回の調査では，C地区の高齢者がどのような生活を望み，どのような価値観をもってそこに住み続けるのか，その思いを明らかにし，支援のための示唆を得るために，住民の思いについてインタビューをもとに分析した．今回はC地区のみであったが，住民はどんなような住みにくい環境でも知恵と誇りをもって住み続ける意思を持っている．ここで明らかになった高齢者の思いやニーズは，互助型ボランティア導入の際に役立つものと考えられる．

このニーズは，地域にすむ若年者のボランティア意識と合致させることにより，「自発的意思に基づく農村集落における互助型ボランティア」の開発にもつながるものとなる．
今回の成果をもって，今後の研究にさらにつなげていきたい．

引用文献

１）本間義人，檜槙貢，加藤光一，木下聖，牧瀬稔：地域再生のヒント，日本経済評論社，2010.
２）水と森を育むエコタウンみなかみ―ふるさとの資源を生かした地域振興構想―，群馬県みなかみ町総合政策課，2008.
３）みなかみ町，町誌みなかみ編纂委員会編：町誌みなかみ，1964.
４）西堀好恵，鈴木知代，入江晶子他：山村地域に暮らす中高年者の生活習慣と主観的健康感・主観的満足感，聖隷クリストファー大学看護学部紀要12，117 － 124，2004.

5）須貝孝一，安村誠司，藤田雅美他：地域高齢者の生活全体に対する満足度とその関連要因，日本公衆衛生雑誌 43（5），374 − 389，1996.

＜付　記＞

本研究は，平成 27 年度佛教大学特別奨励費による研究成果である．

（しばやま　えみこ　看護学科）
（たのなか　きょうこ　看護学科）
（ながい　かおり　看護学科）
（にった　のりえ　看護学科）
（おおた　きょうこ　看護学科）
（ひろい　としみ　前群馬大学大学院保健学研究科）
（まちだ　りえ　渋川看護専門学校）
（いもと　としこ　渋川看護専門学校）
（やまがみ　てつや　高崎健康福祉大学）